

「哲学するなり」(Philosophieren)

川 口 光 勇

はじめに

この貧なる自己の資質に相応しい「哲学すること」(Philosophieren)の探究や解明への道を哲学研究室の先生方の導きによって、二十六歳から七十五歳の今日に至るまで『弘前大学哲学会』の会員として細々ではあるが、この道を歩み続けることが出来たことに勇氣と喜びが沸々と湧いて来ている。

それと共にわたしに襲う感情は、わたしと言う一箇の人間の知的能力の貧困さのために、卒業論文を指導して下さった先生から研究発表者に指名される度に、それを引き受けるだけの力のなさに無力感を引き起こす。

とは言いつても、研究発表会にほぼ毎回参加し、発表者の肉声を聞き、それに対する質疑・補足説明・論争・対話に接することが出来ることに、哲学することの研究心を掻き立てられる。

いま、このような心的状況の下に、今日に至るまでの会員の一人として歩んで来た細路を、記憶を頼りに辿ろうと思う。

(1) 回り道をして始めて師に出会う

戦時中助教諭(のちに准訓導)の資格で郷里の国民学校教師の職として四年目に、陸軍の暁部隊あかつきに入隊し、水上特攻要員としての訓練の最中に廣島原爆に遭遇する。その後間もなく敗戦を迎えて再び国民学校教師の職に復帰する。学校内は、「聖戦完遂」から「七転八起」への掲示板が変わったのみで、平穩の日々が続く。それも束の間で、或る日突然米兵のMPが、教室に入ってきて、掛図の中の戦争の絵を破り捨てた姿に接した時の児童と私達の屈辱の経験とGHQによる修身授業停止の命令を受けた事によって初めて教育の場で敗戦を実感する。この事が転機となって、正式の教師免許状取得するために青森師範学校に進学し、三年間の在学後弘前大学教育学部附属駒越小学校(青森師範学校附属駒越小学校の配置換)に就職する。

当学校はコア・カリキュラムの研究校として発足する。

わたしの研究主題は社会科におけるコア学習である。

授業内容は農村部落の戦前と戦後の部落民のモラルの変化の姿を古老の話をドラマ化しての研究授業である。

この授業に対して参観者の一教師より、農地改革制度からの究明がなされず、古老の話を中心としたものだけでは部落民のモラルは解明されないではないかの指摘を受ける。(参観者の指摘の正しさは大学三年生の時に、東大の大内力先生の「農業政策」の集中講義において、先生は農民のヤヌス意識の説明で論証を得る)。研究授業(県内の公開授業)を通して学んだことは、直接経験や体験に基づく授業に限界を感じ、自分の授業を支える哲学を学ぶ必要に迫られる。苦汁の選択であったが、これを転機に昭和二十六年弘前大学文学部大学科第二学年に編入学する。

当時哲学・倫理学関係で講義担当なされた教官は齊藤武雄・服部紀・復信三郎各先生の三人と、助手の亀尾先生であった。

齊藤先生は演習にカントの『純粹理性批判』の原典を用いて行う。演習参加の学生は先輩の栗野舜と同級生の菅正とわたしの三人のみであり、それに東京大学でカント研究をなさった亀尾先生が参加され、われわれ学生との交わりを深めながら、話し合いが行われた。

服部先生の演習はベルグソンの『時間と自由』(岩波文庫に服部先生の譯書あり)の原典を使用する予定であったが、われわれ専攻学生三人ともフランス語習得していない事を知り、先生はジンメル『生の哲学』(Lebensphilosophie)の原書を行う事に変更する。しかし演習開始までに原書入手困難(当時はコピー機が無い時代)と分かり、急遽、和辻哲郎の『倫理学』に変更すると言ふハブニングがあった。

時にわたしは、齊藤先生の「哲学概論」の一般教養の講義において初めてヤスパースの実存哲学と言う名前を知る。わたしの記憶によると、確か先生は、ドイツ語の用語を板書しながら、「哲学することは超越すること(Transzendieren)であり、内在的なものを超えるところに真の認識し思惟する哲学が実現される。この超越的思惟の主体は可能的実存(mögliche Existenz)の根源としての実存である。」と語られた。

先生は講義の最中に、実存哲学者ヤスパースは終戦直後、ドイツはカントやゲーテをはじめ偉大な人々を生んだ祖国に忠実でありたいと述べて、ドイツ人に勇気を与えた哲学者である。それに平和でなければならぬ政治哲学を求める学者でもある。その事に、わたしの興味と関心があった。ともあれ、わたしは齊藤先生の講義や演習を通して、哲学を勉強したい心が動き、卒業後聴講生して、昭和四十四年二月六日大雪の日五人の学生参加の下にヤスパースの『実存哲学』(Existenzphilosophie)の原典三十四頁のところで進んだところで最後の演習を終えた。先生の最後の言葉は、原典に即して忠実に勉強される事を念願する。学生の皆さん感謝しつゝこれで終わらせてもらおうと言う事を述べられる。その途端学生からの拍手が起り、その音を背にして先生は教室を後にする。わたしはこの先生の最後の演習に参加できたことは生涯の思い出である。

先生の退職後、先生の呼びかけに応じて、訳書なしのトルケッターの『教育と自己存在』(Tollkäter, Erziehung und Selbstsein)の勉強を先生のお宅で行う。わたしは、これらの勉強を通して包括者思想の教育観を学び、自分の授業の支えになる。(齊藤武雄著『ヤスパースの教育哲学』創文社等の著書参照)

それともう一つはヤスパースの『真理・自由・平和』(Wahrheit, Freiheit und Friede)の勉強も先生の自宅で。対一の指導を受ける。(齊藤武雄訳『真理・自由・平和』理想社版と『ヤスパースの政治哲学』創文社等参照)これは非常にわたしにとって一番勉強になった。その理由は、わたしは平和教育を高校生や学生に行う時に、必ず自分の戦争体験特に広島原爆を語ることにしている。それを通して平和の尊さを学ばせる方法を取っている。

この平和を語る時に、ヤスパースの『真理・自由・平和』の思考様式が参考になり、授業に生かすことが出来る面があるからである。右の記述と前後するが、わたしが三年生の学生の時に、齊藤先生によるヤスパースの『哲学的信仰』(Der philosophische Glaube)の演習が行われた。それに毎回伊東・亀尾両先生や他学部生も参加して行われた。その後片山・川戸・笠原各先生も哲学関係の教官として着任され、哲学の講座も多くなり哲学研究室に学ぶに行く他学生も多くなった。

総じて当大学哲学会の先生方の研究室に講義や演習後は石井誠や菅やその他の学生達と共によく訪れたものである。哲学研究会のいずれの教官も学者としての研究者と共に教育者であり、よく学生に対しての助言や指導して下さったこの恩恵は忘れ難くわれわれの心に残っている。

(2) O・Bの哲学会会員として

昭和二十六年哲学研究会は学友会に所属しており部員は栗野部長とわれわれを合わせて三人であった。会の運営や運動方針について、亀尾先生の助言と協力によって行われる。この年は哲学研究室の齊藤・霞、亀尾先生方をお願いして部主催の公開発表と座談会を行う。この会には教育学部・理学部・教育学部の学生の他に文理学部の社会科学研究部員が参加し、参加者同士の討論を行う。後日社研部では、学生が中心となってマルクスの『物神論』の発表や演劇部ではモリエールの『守銭奴』を市民参加の演出を行う等他の研究部も活動し始める。

弘大文理学部学友会執行委員会は、『執行委員会情報』創刊号(かり刷)を発行をし、学友会連絡協議会設立の記事や東北地区各大学連絡協議会・第五回全学連開催記事を記載し、学生への啓蒙活動に乗り出す。ただわたしの気になったのは全学連活動を批判し反戦学生同盟支持の決議をそのまゝ記載していることに違和感をもった。(十四年三月中央大学会場での大会との関連上)。この事について栗野氏と語り合う。其後彼は川口を学生大会議長に指名する。学生大会は学友会解散案・学友会の強化案、自治会

発足案等の動議の連発で大会統行困難となり議長を辞することになる。学生の声のなかには弘前大学内の学生協議の運動を主とするものや、全国組織と連動案等である。そのなかにあつて、哲学研究部としては、一線を画して研究部員以上の研究発表会・座談会の開催を計画する。しかし実際は計画案で終わる。われわれ哲学研究部員達は後輩に引き継ぐ遺産を残すことなく卒業する。

われわれが卒業して二年目の昭和三十年弘前大学文理学部自治会が誕生し、弘前大学文理学部哲学研究会で文理科三年生齋藤俊哉が会長に就任し哲学研究会機関誌『哲学会誌』の創刊号を発行する。賛助会員に齊藤・霞・川戸・片山・伊東・笠原・亀尾各先生、学生会員には教育学部・農学部・文学部の各学生併せて十三名に卒業生を特別会員を加える。卒業生にとっては将に晴大露^{（あき）}の報で、わたしたちの考えることの及ばなかったことの誕生である。「発刊を祝して」、哲学研究室主任齊藤先生は「わが哲学研究部は学友会創設以来活動を続けて来たのであるが、この度はじめてその機関誌をもつことができたのは確かに一段の飛躍を物語るものである」と祝福の言葉を送っている。齊藤会長は「生活における各自異なつた世界観の深化に役立たせん事を願つている」と宣言している。この会は哲学研究会の源流である。

昭和三十四年には弘大文理学部哲学研究会から弘前大学哲学研究会に名称を変更し、会誌名は『哲学会誌』を踏襲し創刊号として発行する。昭和三十五年の第二号は弘前大学哲学研究会と名称を更め、齊藤武雄教授文学博士授与記念特集号として発行する。この第二号にエドムント・ヘルツエン東北大学教官「日本人のあきらめについて」（小島尚先生訳）の講演原稿を会誌に載せることを編集会議席上大和田貞弓が主張する。この第二号の編集発行はすべて大和田が行う（広告料の交渉も含む）。この会誌発行を残して他界せし大和田を惜しむ。

昭和四十一年弘前大学哲学会と名称改正が行われる（弘前大学哲学会規約改正が総会の決議で可決する）。会長齊藤武雄、委員、伊東・加来彰俊・笠原・亀尾・野町啓・栗原靖各先生、卒業生の門口省吾・大和田・白取肇・三上登・齊藤（俊）・二唐資朗、教官幹事亀尾・野町各先生、卒業生幹事石井誠、他（一名）によつて哲学会の運営がなされる。

四十四年発行『哲学会誌』第五号には齊藤武雄先生退官記念特集号の編集を行う。教官幹事加来・栗原両先生は齊藤先生の写真・略歴・最終講義・業績等々の資料集めの編集を行う。他方卒業生幹事白取と他一名は卒業生十名に齊藤先生の思い出原稿依頼のみの仕事である。ミスの許されない編集で緊張したが、遂に四月二十五日発行に漕ぎつけることが出来た。

昭和四十九年に『哲学会誌』（第九・十合併号）発刊す。その時の教官幹事亀尾・栗原両先生、卒業生幹事成田紘治他一名。幹事会では会費納入の停滞により、会始まつて以来の合併号を発行することになる。このときの公開講演に弘大教授池田雄三先生、「音楽と文字と社会」の原稿と卒業生渋谷克美・木立雅憲・小笠原剛平、他一名の卒業生の原稿集録の編集である。

昭和六十年『哲学会誌』第二十号は伊東洋一先生退官記念特集号発行、会長は齊藤武雄先生、教官幹事岡崎英輔・座古田豊両先

生、卒業生幹事成田秘治、他一名で、幹事会において岡崎先生より会費納入の方法について振替用紙使用による連絡の仕方や会誌処理の仕方等の提案し総会で可決す。それにより会費納入が好転に向かった。

平成九年『哲学会誌』第三十号には「斉藤武雄先生を偲んで」の特集号の編集となる。「弔辞」弘前大学人文学部代表岡崎先生、「斉藤武雄先生とのお別れ」弘前大学哲学会会長五十嵐先生・「弔辞」教え子代表川口光男と「デモクラシーのために」松居正俊先生の論文と卒業生三人の原稿を載せている。急告として「友村教授のご逝去」を五十嵐先生がお書きになっている。このときの教官幹事を宮島磨・粟原各先生、卒業生幹事安藤清三・木立雅憲他一名で宮島先生が編集後記をお書きになっている。

以上十年一昔と言う諺に従って、『哲学会誌』十号・二十号・三十号揃り起して見る時に、当時の事が鮮明に浮びあがって来る。この会誌を見るにつけ会誌に学術的論文の原稿が誌面を飾る事になるであろうと予感す。それは卒業生では斉藤（俊）、木立の発表や投稿原稿の多さを発見する。尚弘前大学附属図書館長岡崎先生は『哲学会誌』全巻が図書館にあるとの事なので、この機会に卒業生会員の活用されんことを切望する。それを見て会員は新しい発見をする事があると思う。

尚わたしごとだが、弘前在住者の故に、時折名目的卒業生幹事となる。この間、成田秘治（ガリ印刷で須藤昌徳協力）と、その後安藤清三（名簿整理等のコピー機活用）、木立・小野、新たに頼りになれる青森在住三上と共に、その中に入れてもらう。いずれも卒業生幹事として活動している。願わくは会員が哲学研究会に多く参加される事を望む。それにより会のより大きな飛躍がなされるからである。（後輩含めて五名全員参加す。）

最後に、学会事務局より、原稿依頼のお話があり、老骨のわたしにとつては、最後の投稿の機会が与えられたことに感謝の念を抱く。しかし気のみ焦せり、折角のご好意を生かしきれずに、単なる自己史的証言の回想記に終ってしまったことを、会員諸氏にお詫びをする次第である。（敬称略）

※ 参考文献

- a 『ほんものの教育』第21回読売教育賞受賞者の記録（読売新聞社編）——小・中・高校の社会科教育部門（『倫社新聞』発行で生た倫理の指導 川口光男氏）167頁—186頁。読売新聞社刊（昭和47年8月）
- b 斎藤弘著『公民科教育への歩みと課題』（富士教育出版社 平成3年）——第8章(2)348頁に拙者の授業記録の紹介記事。
- c 拙論「十二年間の倫社授業の歩み」『道德教育学会 雑誌『道德と教育』』二百号 平成52年。その他として手作りの「倫社新聞」発行（七三〇号で廃刊）

（第二回生、弘前学院大学非常勤講師）